It's a Beautiful Wonder Land.

（エレクトリック・ギター・ワールド）
を探検する

STEP ③ BODY & NECK

INTRODUCTION

トータルなサウンドクオリティ、よりスムースなプレイアビリティを求め、ヤマハはボディやネックにも様々な工夫を凝らしている。ステップ③では、ボディ&ネックコンストラクション、ボディ加工、ネック―ヘッドの3点に分けて主な特徴をピックアップしてみる事にしたい。

■BODY & NECK CONSTRUCTION

ボディとネックの接合には大きく分けて3通りの方法がある。スルーネック、セットネック、ボルトオンネックの3つだ。木材の種類によるトーンキャラクターに加え、ネックの接合方法によりギターのサウンドキャラクターは大きく変わってくるものだ。いずれにしてもネックとボディが完全に一体化するよう強固に固定されている必要があるが、ヤマハはオリジナリティ豊かな技術でクリアしている。

Through Neck

ネックをボディエンドまで延長し、その両サイドにボディを貼り合わせる方法。最も機械的強度に優れ、抜群のサスティーン特性を発揮。SGシリーズ、LBシリーズでは"Tクロスメイプル"というヤマハ独自の手法、またRGX−1200、BB、BX等は、"メイプル+マホガニー(5P)"によるスルーネックを採用。継ぎ目のない構成のため、固有振動を排除し、バランスのよい鳴りとサスティーンを獲得している。しかも、ヒールレスカッタウェイ形状にできるため、ハイポジションでの演奏性の高さも大きな魅力になっている。

Set-In-Neck Joint

ネックとボディを塗装前に接着固定してしまう、伝統的な方法。弦振動をボディの隅々にまで素直に伝えるため、シャープなアタック感を持つ。ヤマハでは、SG、SFX、HR等、各シリーズ別のサウンドコンセプトに合わせ、ボディとネックのマテリアルを構成。マテリアル双方のキャラクターによるブレンディサウンドを特徴にしている。また、独自の木工技術によりスルーネック同様のヒールレス形状を実現。抜群のプレイアビリティも獲得している。

Bolt-On-Neck Joint

ネックとボディを別々につくり、最終的にボルトで固定する方法。一般にハイポジションでの演奏性がスムースではないが、ヤマハは"スーパープレイアビリティジョイントシステム"や、"ディープ・インサート方式"により、スルーネック並の演奏性とセットネックに匹敵する密着度を実現している。サウンド的にはシャープ&タイトなレゾナンスだ。多くの機種に採用されているが、それぞれネック材とボディ材の好マッチングで、ハイクオリティなサウンドに仕上っている。

■BODY

電気楽器であるエレクトリックギター&ベースも、実はボディの振動が音創りの重要なファクター。様々な木材をヤマハ独自の技術で加工し、最高のボディ振動を引き出している。前述した基本的なボディ&ネックコンストラクションの他にも、プレイアビリティやサウンド等の色々なアイデアも導入している。

Double Horn Cutaway

RGX、RBXシリーズに採用の、カッタウェイ部のボディトップをさらにカットする加工方式。これにより、ハイポジションの演奏性が一段と高まると同時に、ヤマハならではのスマートなシェイプに仕上がっている。

Output Jack Layout

RGX、LBシリーズおよびMB−Ⅰに採用。アウトプットジャックをボディバック&サイドに、それぞれのモデルに合わせた独自のデザインでレイアウト。大胆に切り込んだジャック部により、激しいアクションやアーミング時のシールドコードのアクシデントを解消。さらに、導電塗装等により外来ノイズに対する防止策も万全。

Round Top

MB、LBに採用。音源としてのボディの鳴りを効果的にフィードバックし、コシのあるトーンをクリエイト。流麗なカーブを描くボディトップ形状が魅力。さらにバックには、身体にジャストフィットするコンタードカッタウェイを施し演奏性も向上させている。

Round Back

LB−Ⅰでは、ボディバックもヤマハのオリジナルデザインによるラウンド(カット)を採用。従来のラウンドボディとは一線を画した個性的なデザイントレンドをプロデュース。プレイヤーと一体化する群を抜くプレイアビリティと、美しい面の流れによる造形美は、まさに、クラフトワークの極みともいえる手法だ。

BODY & NECK Impression

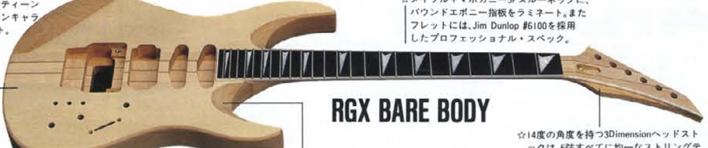
●ボディとネックのジョイントには、スルー、セットネック、ボルトオンの3種類がある。プレイヤーにはそれぞれのサウンドの特徴で色々好みがあるものだが、セットネックやボルトオンタイプのネックを好むプレイヤーは、好みのサウンドとハイポジションの演奏性とのジレンマに悩まされているのが普通。特にボルトオンタイプのネックでは20フレット近くは弾きづらさ故に殆んど使わず、プレイの音域は必然的に狭いものとなってしまったものだが、※SPJによるジョイント方式で、ボルトオンタイプのサウンドで、スルーネックに近い感覚のハイポジションプレイが出来る。SESSION Ⅱでは22Fの1〜6弦のチョーキングがネックに親指をかけたまま、17Fと同じ感覚で可能。さらにRGXではダブルホーンカッタウェイの効果と相まって、その感覚は24Fまで続いている。こういったハイポジションプレイのしやすさは、普段ピンと来なくても、エキサイトした時に必ず有難みを感じるもの。盛上がって来ればより高い音を派手に弾きたくなって来るからネ。その辺はベーシストも同じだと思うけど、LB-Ⅱ、RBX等のモデルは全て※SPJ加工だから、ギタリストを圧倒するようなハイポジション・ソロの可能性が開けたっていう訳だネ。スルーネックの演奏性に関しては文句無し。セットネックはヒールレスなので、殆んどスルーネックと同じ感覚だと思っていい。

●LBのラウンドトップは、MB譲りのサウンド追求の結果だけど、ラウンドバックは主に演奏性を追求した結果みたいだネ。ストラップつけて立って弾いてみて初めてわかった。ロングスケールのベースって身体が大きい人でも長い板をブラ下げてるみたいで扱いにくかったと思うけど、バックをカットしただけでこんなに身体に馴じむモンなんだネ。身体にボディの振動が直接伝わる感じは凄くいい。多分プレイにもいい影響が出てくると思う。

●RGX、LBのセーフティジャックレイアウトは、特にステージで有難みが判ると思う。普通ジャックにシールドつないで、エンドピンとストラップの所にはさむけど、それでもまだ、手引っかけたり、ギターだとアームがぶつかったりとかしちゃったからネ。これらのレイアウトは、ちょっとしたアイデアかも知れないけど画期的だネ。

●セミアコの暖かい音は捨て難いけど、どうしてもセミアコ1本じゃシャープなソリッドぽい音はカバー出来ない、と思ってた。ヤマハSAは結構ソリッドな音も出ちゃうんだ。コンビネーションブロックの威力だと思うけど、セミアコの魅力はそのまま残してコンテンポラリーにアレンジした感じがする。

※SPJ＝スーパープレイアビリティジョイントシステム



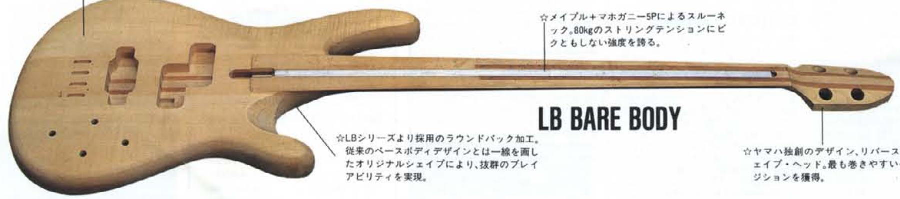
RGX BARE BODY

☆5Pインテグラルスルーネックにアルダーウイングボディをコンバイン。豊かなサスティーンと、シャープなトーンキャラクターをクリエイト。

☆メイプル+マホガニー5Pスルーネックに、バウンドエボニー指板をラミネート。またフレットには、Jim Dunlop #6100を採用したプロフェッショナル・スペック。

☆ハイポジションでの高演奏性を獲得した、ダブルホーンカッタウェイ。

☆14度の角度を持つ3Dimensionヘッドストックは、6弦すべてに均一なストリングテンションをプロデュース。



LB BARE BODY

☆独自のTクロスメイプルをラウンドトップで構成。弦振動は切れ目のないループを描き伝達される。

☆メイプル+マホガニー5Pによるスルーネック。80kgのストリングテンションにビクともしない強度を誇る。

☆LBシリーズより採用のラウンドバック加工。従来のベースボディデザインとは一線を画したオリジナルシェイプにより、抜群のプレイアビリティを実現。

☆ヤマハ独創のデザイン、リバース"V"シェイプ・ヘッド。最も巻きやすいペグポジションを獲得。

■NECK

ネックは音程を決定する演奏上最も重要な部分であり、サウンドを決定づけるファクターのひとつでもある。ヤマハでは、演奏性とサウンドの両立を目指し、ディテールに至るまで様々な工夫を凝らしている。

Scarf Joint Neck

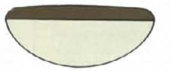
ハーダーモデル RGX のネック材には、ブライトなトーンとロングサスティーンが冴えるハードロック・メイプルを採用。ヘッドストックとの接合部にスカーフジョイント方式を導入している。ピュアでシンプルな美しさを実現すると同時に、構造的な一体感により強度アップも達成。メイプル材の特徴をフルに引き出すマニアライクなネックコンストラクションだ。

またフィニッシュも、サテンフィニッシュとオイルフィニッシュのナチュラル仕上げが2タイプ用意されている。

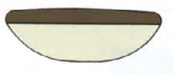
Wide & Thin Neck

発展を続けるロックギターテクニックを完全にフォローするために、RGXでは新設計"ワイド&スィン"ネックを採用。確実なフィンガリングを約束する、ナット部で43mm幅のワイド指板仕様。そして、スピーディなフィンガリングやロングプレイにも反応がよく疲れを感じさせない薄めにカットされたUシェイプ仕様が魅力。世界のロックギター・トレンドをいち早くキャッチした、インターナショナルスペックだ。サウンド的にもセレクテッドメイプルを使用することで、ブリリアントかつアタッキーなRGXトーンを創出している。

▼ノーマル"Uシェイプ"ネック



▼RGX"ワイド&スィン"ネック



Jim Dunlop #6100 Frets

RGX−1200、800、SESSION Ⅱ−900、700シリーズにはMade in U.S.A.のJim Dunlop #6100(エクストラ・ジャンボ)フレット採用。このプロスペック・フレットは、シャープなサウンドの立ち上がりとロングサスティーン、スムースなチョーキングを実現。加えて、硬度的にも抜群の耐久性を誇っている。

Another Frets

ヤマハのエレクトリックギター&ベースは、各シリーズ&モデル別に最適のフレットを採用している。例えば、ミドルクラスキングRGX−600シリーズではJim Dunlop #6100に匹敵するオリジナル"エキストラ"ジャンボタイプを新規に、RGX−500、SESSION Ⅱ500、SFX、HR各シリーズ等にはすでに定評のジャンボタイプを採用。それぞれのサウンドキャラクターを生かした最上の弾き応えを提供している。

Nut

SESSION Ⅱ−500、RBXシリーズ、LB−Ⅱ、等には、音の伝達性、強度、耐摩耗性に優れたグラファイトナットを、そしてSFX−Ⅱ&Ⅲ、MB−ⅡD&ⅢS、BX、BB等には、優れた音の立ち上がりと、抜群の安定性を誇るユリア樹脂ナットを採用。新開発アジャスタブルナット、ローラーナット以外にも、ヤマハはサウンドキャラクターにベストマッチングするナットを開発している。

NECK Impression

●ヤマハのネックは特に日本人にフィットするし、仕上げもバラつきが無くて安定してるって定評なんだけど、RGXなんか、今風のルックスしてるクセにネックの感触はダンゼン安定してる。スピーディ、トリッキーなプレイを追求してるギタリスト向けに仕上げたらしくて、ネック裏はナチュラルサテンフィニッシュ。これはポジション移動が凄い滑らかなんだヨネ。マニアックシリーズはオイルフィニッシュだけど、さらにベアウッド感覚って言うか暖みが伝わるという仕上げ。これも捨て難い。"ワイド&スィン"のネックシェイプ、普通のに慣れた人はとまどうかも知れないけど、結局ソロを追求しながら、リズムもカバーしようとすると、結局誰でもこういう巾広の薄いネックに落着くんだよネ。あとRGXとSESSION Ⅱ、初めっからJim Dunlop #6100打ってあるのが凄いネ。プロのギタリストも、結局これに打直してる人多いから。音がシャープでチョーキングとか良く伸びるからネ。ミドルーロークラスは、Jim Dunlopじゃないけどジャンボ・フレット。これも時代を把握してると思う。今の音楽だったら太いフレットじゃないとキビシイよ、ヤッパシ。

●ナットって開放弦のサウンド決めちゃうから何でもいいって訳じゃない。ブラス、グラファイト、ユリア樹脂って、色々使ってるけどこれ、そのギターのフレット押さえた音とのコンビネーションしっかり考えて決めてるみたい。細かい所まで考えてるヨ、やっぱし。

STEP ④ MAINTENANCE

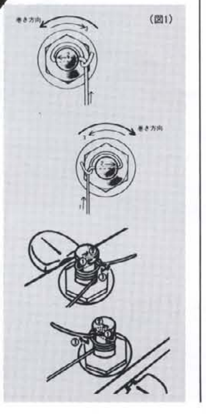
INTRODUCTION

エレクトリックギターやベースを買ったら買いっぱなし、あとは時々弦を替えるくらい…という人は結構多いはず。運良く自分に100%ピッタリのコンディションならいいがそんな事は滅多にないし、また、次第に欲が出て色々とイジリたくなるものだ。ギターはちょっとした調整で見ちがえる程変わってくる。ここでは最も基本的な調整法、その他を紹介しておこう。

■弦の張り方

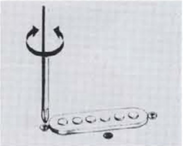
簡単なようで意外にめんどうなのでつい手を抜きたくなるのが弦交換だが、ペグに巻いた弦の状態でそのプレイヤーの腕がある程度まで判ってしまう、というくらい重要なポイント。要は、ペグに必要以上に巻かず、整然と3〜5回巻けばいいのだが、巻き方には色々流派(？)があるようだ。ここでは最も確実な巻き方を紹介しておこう。(図1)こうして巻いたら、まずチューニングし、各弦をフロントP.U.の上あたりでつまんで強く(切れない範囲で)引張ってまたチューニング。これをチューニングが安定するまで4〜5回くり返す。これで完璧だ。なお、RM−Pro、Rockin' Magic Ⅱといったロック式のタイプの場合も、この作業の後、弦をロックした方が確実だ。ボールエンドを切らずに弦セット出来るんだからこのくらいの手間をかけて欲しい。それで初めてステイチューニングのヤマハトレモロユニットシステムの実力が発揮されるという訳だ。

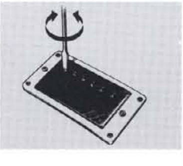
(図1)



■Pick Upの高低調整

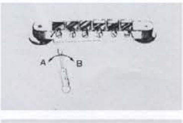
P.U.のポールピースから弦までの距離を調整することで、各弦の音量バランスをとることができる。まずハムバッカーの場合、ポールピースをドライバーで上下させて調整することができる。シングルコイルP.U.やフルカバードP.U.の場合こうした調整は不可能だが、これらの場合は製造時に充分なバランスに設定してあるので問題ないだろう。さらに、P.U.全体の高低調整で、自分の好みに合ったパワーバランスを得ることができる。ただし、パワーを得たいがゆえにポールピースを弦に近づけすぎると、マグネットの引きつけにより(P.U.の磁力はかなり強いのだ)、逆にサスティーンがそこなわれることがあるので注意して欲しい。このへんの、微妙なバランスは、プレイヤーの感性が問われるところだ。

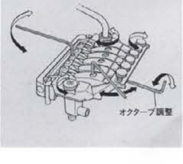




■オクターブ調整

エレクトリックギターやベースは出荷時にこの調整をしてあるが、張ってある弦のゲージやメーカーを変えたり、経年変化でギターのコンディションが変わってくる(いうまでもないがギターは木で出来ていて、その木はギターになった後も呼吸していると思ってヨロシイ)と、ハイポジションに行くに従って正しいピッチが得られなくなってくる。それ程耳のできていないアマチュアの人がそのまま弾き続けると、いつまでたっても耳は出来ないし、聞いている者も非常に不快だ。そこでオクターブ調整が必要になってくる。正確にチューニングしてから12フレット真上で、ハーモニクスピッキング(弦に軽く指を触れてピッキングする)した音と、12フレットを押弦した音とが同じピッチになるようにブリッジの駒を動かして調整を行なう。押弦した音の方が高ければテールエンド側に、低ければネック側に駒を動かす。この作業を繰返し各弦でオクターブピッチがピッタリ合うまで続ける訳だ。慣れないとかなり時間がかかるが、チューニングメーターと耳を使って、ぜひ自分でやってみて欲しい。なお、弦は古くなるとピッチが合わなくなるものなので新しい弦に張替えるたびに必ず調整する習慣をつけた方がいい。





オクターブ調整

■ギター保管法等

持ち運びには確かにソフトケースは便利だが、保管には(できれば持ち運びにも)ハードケースを使いたい。そして特に、湿気の強い時期には乾燥剤をギターに直接触れないようにして入れておくこと。あとは塗装の保護のために時々ポリッシュで磨いたり、メカ部の動きを滑らかにするため専用のスプレーを使えば万全だ。

以上、ここに紹介したメインテナンスを確実に行なえる便利なアイテムが、新登場の"メインテナンスキット"をはじめ、ヤマハには色々と用意されている。大切な愛器のために、ぜひ活用して欲しい。

HAVE A GOOD ROCK!!